

大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅱ

— 乳児期の自己の発達における集団活動の意義 —

柳瀬 洋美 石坂 麻美 和泉 よしの

乳児期において、親などの身近な大人との安定した1対1の信頼関係が育まれることは非常に重要である。しかし、それは2人だけの閉ざされた環境においてという意味ではない。この2人を取り巻く環境がどのようなものであるかは、個人の成長や1対1の関係のあり方にも影響を及ぼす。

本研究は、学内で実践している、主に乳児期の親子を対象とした子育て支援活動について、乳児期の自己の発達という視点から、集団活動の意義を探求したものである。

乳児期の子どもにとって、個々の主体性が尊重される中で安定して過ごす集団活動体験は、多様ななかかわりを成長とともに体験することができ、より多くの人に「自己」が受容される体験の積み重ねへとつながっていく。その結果、自己肯定感が育まれ、自信を持って、外の世界へも自発的に働きかけていく意欲へとつながるのではないかということが示唆された。

キーワード：乳児グループ活動 集団 子育て支援 自己の発達 多様ななかかわり体験

1. はじめに

乳幼児期、特にその初期の段階（0歳～3歳）において、親などの身近な大人との安定した安心できる1対1の信頼関係の構築は、その後の人間関係の基礎であり、ヒトが人として社会において生きていく上での重要な基盤となる。

こうしたことから、乳児期・幼児期初期の子どもたちの集団活動が取り上げられることは少ない。

それでは乳児や幼児期初期の子どもたちにとって、集団活動は意味をなさないものであろうか。

本研究の対象である、乳児グループ活動「ほかほかひろば」は、地域在住の0歳からおおむね3歳までの子どもとその家族10～15組程度（参加登録制）を対象とした、親子参加型の地域子育て支援活動である。

「大学における乳児期・子育て支援グループ活

動Ⅰ」（柳瀬，2010）¹⁾では、0歳から3歳未満という、発達面において幅も個人差も大きい乳児期・幼児期初期の子どもたちにとって、「ひろば」という比較的自由度の高い「場」で集団で過ごす意味は大きく、さらに、安定したメンバーでグループ活動を体験として積み重ねていくことは、大人にとっても子どもにとっても大変有意義であることがわかった。

また、大学ならではの子育て支援活動という点で、学生の果たす役割も大きく、本活動の特色であるということもわかった。

本研究では「大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅰ」で得られた考察を踏まえ、乳児期・幼児期初期の子どもたちの発達において他者や集団全体とのかかわりがもつ意味について、人間関係の発達を中心とし、「自己」「人」「もの」という3つのかかわりという視点から考えていく。なお、乳児期とは、一般に0歳～1歳3ヶ月を指す場合が多いが、本学の乳児グループでは、

子育て支援という活動趣旨から、乳幼児を抱えた家庭が、第1子のみならず、きょうだいそろっての参加がしやすいように、との配慮から、参加対象年齢を、保育所の乳児クラスに相当する0～3歳未満児としている。

2. 目的

個々の活動や1対1のかかわりが重視される乳児期・幼児期初期の子どもたちが集団活動を体験することの意義について、子どもの発達の内、「自己の発達」という視点から考察することを、本研究の目的とする。

3. 方法

- (1) 乳児グループ活動「ぼかぼかひろば」の毎回のビデオによる活動記録や参加児一人ひとりの活動記録および活動後の話し合いをもとに、個々の子どもたちの様子について、「自己」「人」「もの」のかかわりという視点から整理し、考察する。
- (2) 子どもの発達の内、自己の発達について、「お名前呼び」の場面を取り上げ、その変化の様子を分析し考察する。
- (3) 個と集団とのかかわりに焦点を当て、子どもたちの遊びの様子やそれぞれの特徴をまとめるとともに、人とかかわりに焦点を当て、分析し考察する。

なお、整理・分析に際しては、本研究の対象である心身の発達が著しい3歳未満児を、全体的な発達状況から、概ね1歳3か月を境に、「乳児期」と「幼児期初期」の2つの時期に分けることとする。

＜研究対象＞

東京家政学院大学・乳児グループ活動「ぼかぼかひろば」（以下、「ひろば」とする）の内、参加児の年齢構成が似ている2009年度および2011年度活動の参加児を研究の対象とする。

参加者の内訳は表1に示すとおりである。

表1 参加者の内訳

*()内の数字は、後期からの参加者数

**転出者を表す

参加者\活動年度 (子どもの年齢は活動開始時のもの)	2009年度	小計	2011年度	小計	計
0～1歳	3(1)*	17	4(1)	20	37
1～2歳	13(-1)**		13(1-1)		
2～3歳	1		3		
保護者(主参加者)	14(1-1)		17(1-1)		31
学部生(4年生)	13		14		27
大学院生	1		0		1
教員・補助員	2(内1名は補助員)		3(内2名は補助員)		5

人数はすべて延べ人数

＜対象となる活動の概要＞

活動趣旨

「ひろば」の主な活動趣旨は次の4点である。

- ①親と子がほっとできるような「居場所（子育てひろば）作り」を通し、大学内における子育て支援活動という特性を生かし、親と子・学生・教員が出会い、共に育ちあう子育てをめざす。
- ②一人ひとりの子どもたちの成長や個性を大切に、共にゆったりとした楽しい時間を過ごす中で心豊かで多様なかかわりを育む。
- ③参加者同士が、お互いに子どもたちの様子を見守りながら、子育て等についての話し合いや情報交換をおこなう。

表2 年間活動概要

	2009年度	2011年度
①	オリエンテーション	
②	コーナー遊び(魚釣り・マラカス・たらい・車・ボール・お二階ハウス)	コーナー遊び(ままごと・車・ブロック・お二階ハウス・ボール)
③	コーナー遊び(ままごと・たらい・絵本・お二階ハウス)	コーナー遊び(ままごと・お二階ハウス・車・ビニールボール)
④	お散歩(水あげ・オーガンジー)・車	コーナー遊び(ままごと・お絵かき・車・絵本・ブロック・シャボン玉)
⑤	七夕(短冊作り・劇)	七夕(短冊作り・壁画)
⑥	コーナー遊び(トンネル・ブロック・線路・お絵かき・オーガンジー)	乳児家族参加デー
⑦	コーナー遊び(トンネル・お二階ハウス・車・ブロック・ままごと)	コーナー遊び(ボール・お絵かき・ままごと・車・ブロック・トロバス・オーガンジー)
⑧	乳幼児合同家族参加デー	コーナー遊び(ままごと・ブロック・ボール・車・お二階ハウス・ビニールボール)
⑨	コーナー遊び(ビニールボール・フラフープ・ボーリング・歌)	お散歩(シャボン玉・段ボールそり・探検)
⑩	コーナー遊び(ままごと・お二階ハウス・車・歌・魚釣り)	お散歩(シャボン玉・段ボールそり・探検)
⑪	クリスマス会	コーナー遊び(トンネル・車・ままごと・工作・絵本・音楽)
⑫	コーナー遊び(ままごと・トンネル・ブロック)	コーナー遊び(ビニールボール・トンネル・工作・絵本・車)
⑬	コーナー遊び(ままごと・三段舞台・トロ・フラフープ)	クリスマス会
⑭		コーナー遊び(ブロック・車・ままごと・お二階ハウス)

表3 1日の主な活動の流れ

10:40	活動開始(ぼかぼかひろばオープン) [親子合同活動・前半] ・参加児のお名前呼び ・自由あそび
11:15	[親子分化活動] ・親グループ活動「ぼかぼかサロン」 (サロンコーナー) ・子グループ活動(自由遊び)
11:40	[親子合同活動・後半] ・「スポットタイム」(手遊び・歌遊び) ・さよならの歌
12:00	ひろば活動終了 * 終了後、希望者は自由に昼食休憩
12:50	全活動終了

(*時刻はおおよその目安)

④学生にとっては、直接、乳児や保護者と接することで、乳児期の子どもの成長を実感でき、保護者の思いを受けとめ共感し理解する力を培う上で、貴重な経験の場となる。また、保護者にとっても他の親子とのかかわりを持つことで、自身の子育てを見つめ、視野を広げることができる。(柳瀬,2010)¹⁾

2009年度及び2011年度の年間活動(表2)および1日の活動の流れ(表3)は次に示すとおりである。

4. 結果および考察

(1)「ひろば」活動にみる子どもたちのかかわりの発達

「ひろば」の毎回のビデオによる活動記録や参加児一人ひとりの活動記録および活動後の話し合いをもとに、個々の子どもたちの様子について、「自己」「人」「もの」のかかわりという視点から乳児期と幼児期初期に分けてまとめたものが表4である。なお、「人」に関しては、乳幼児期においては、身近な人との1対1の関係が重要な基盤となることから、かかわりの対象をさらに「母」、母以外の大人である「リーダー(学生)」、「他児」に分けて整理した。

表4から、それぞれの時期のかかわりの特徴を比較してみると、以下のことがわかった。

①「自己」との関係では、0～1歳3か月の子は人見知りが始まる時期である。また、周囲を観察する等、意識できる範囲が広がってくる。1歳4か月～3歳未満の子は、やりたいこと・嫌なことなど自己主張がみられる。また、集団状況をはっきり把握できている。

②「母」との関係では、0～1歳3か月の子は母親が基盤となっており、母を介して周りの人やものに興味を持つ様子がみられる。1歳4か月～3歳未満の子は母の存在が確認できるかどうか重要になっている。

③「リーダー」との関係では、0～1歳3か月の子は「ひろば」開始当初はリーダーを警戒している様子が見られるが、回を重ねるにつれ、ものを媒介としたかかわりなどが増え、相手と共感する活動を楽しめるようになる。リーダーに何かしてほしい時は、ものを差し出したり、指差しで伝えている。1歳4か月～3歳未満の子は、リーダーとの1対1の関わりから、他児とのやりとりが増えている。リーダーにしてほしいことは言葉で伝えることができる。

④「人」との関係のうち、「他児」との関係では、0～1歳3か月の子では「どうぞ」や「乾杯」など、その場での単純なやり取りが多く見られるが、1歳4か月～3歳未満の子では「一緒に遊ぼう」や「貸して」など、他児を意識し積極的に働きかけている。また、特定の子を意識している様子や自分より小さい子への配慮も見られる。

⑤「もの」との関係では、0～1歳3か月の子は音の鳴るおもちゃを振る、野菜を切る、段ののぼりおり等、ひとつの行動を繰り返すことが多い。1歳4か月～3歳未満の子は場面や環境設定も自ら行ない、見立て遊びなどの様子が見られる。お気に入りのおもちゃや、同じコーナー遊びが継続されている。

(2) 乳児期・幼児期初期の自己の発達

乳児期・幼児期初期において自己の発達は重要なテーマである。

生まれたばかりの乳児の自己は、自他が未分化である。そこからしだいに自己とそれ以外のものが分化していく。主に1歳頃までにおいては自分の身体に気づくことから始まり、自己の芽生え

表4 「ひろば」活動にみる乳児期と幼児期前期のかかわりの特徴

	乳児期(0歳～1歳3か月)	幼児期前期(1歳4か月～3歳未満)
自己	・人見知りが始まる。 ・発語が増える。 ・周囲を見ることが多くなり、自分の意識できる領域が広がってくる。 ・お名前呼びでは、自分以外の名前でも返事をする。 ・後期になると活動の流れを理解し、片付け等積極的を手伝う。	・やりたくない事や嫌な事ははっきり表現している。 ・母親との距離や様子を気にしながら遊んでいる様子。 ・言葉で自分のしたいこと、やりたいことを示す。語彙数が増える。自己主張をする。 ・リーダーや母に自分のやっていることを見てもらい、褒めてもらったり受け止めてもらうことで安定している。 ・集団のお名前呼びの場面で注目されると恥ずかしくて隠れるなどの行動が見られる。子ども自身が集団状況を認識している様子。
人	母	・遊びの中でも母の存在を意識して遊んでいる。途中で母に見せに行くと言ったり、何度も母の所へ行く。 ・母がいなくなる、見えなくなると泣いて探しに行く様子も見られる。
	リーダー	・リーダーの遊びを見て、真似して遊んでいる姿が見られる。リーダーのお手伝いをする。 ・リーダーが子どもの行動のきっかけになるような言葉かけをしている。 ・遊びの始めはリーダーと1対1の関わりが多いが、時間が進むにつれ、リーダーを媒介として他児とのやりとりがみられる。 ・リーダーに対して、してほしいことを伝える姿がある。 ・リーダーと約束ができるようになる。
	他児	・おもちゃの取り合い等友達同士のトラブルを経験する。 ・他児の遊ぶ様子を見て模倣する子が多い。また、他児の遊んでいるおもちゃに興味を示す。 ・遊びの中でリーダーを介して他児とのやり取りをする。 ・一緒に遊ぶようになり、「貸して」などものを媒介として他児に働きかける子も見られる。 ・他児に対して「ダメ」と伝える。 ・特定の他児とトラブルが起きたり遊んだり、意識している様子が見られる。また、トラブルややりとりも1歳半未満に対してはみられなかった。
もの	・鈴の入ったボールや、鈴、マラカス等音の出るおもちゃを振ったり蹴めたりする。 ・興味のあるものに一直線に向かっていく。 ・三段舞台ののぼりおりを繰り返す。 ・布やトンネルは他児が遊ぶ様子を見ていたり、母と一緒に挑戦、一人で挑戦してみる。 ・パペット人形に興味をもつ。 ・スヌーピーボールを見つめたり追う。 ・野菜を切ったり、ままごと遊びを楽しむ。	・自分のお気に入りのおもちゃがある。それがあることで安定し、なくなると不安になる。 ・目についたコーナーを次々に回り、いろいろな遊びやものに興味を示す。 ・普段日常生活で見ている動作をおまごとして見立ててごっこ遊びをする子が多くみられる。 ・シールを貼る、野菜を切る等の作業を夢中でする子が多い。 ・おままごと、乗り物が年間を通して毎回見られる。 ・積み木を積んで崩れることや、周りの反応を見て楽しむ。 ・お二階ハウスにのぼって、そこを拠点におもちゃを取りに行き遊びが姿がある。 ・虫やシャボン玉など、初めて見るものや遊びに興味を示す。

が出てくる。2歳頃には自己認知が可能になり、その過程では「自己主張」や「自己抑制」の発達重要な課題となる。また、自己の発達に伴い、感情にも以下のような変化がみられる。「1歳代になると、自己意識が獲得されます。つまり、自分が周りの人から見られていることに気がつくようになるのです。その自己意識と共に生じる感情は、自己意識的感情と呼ばれます。自己意識感情には、てれ、共感、嫉妬の3つがあります。…(中略)…さらに2歳代になると他者からみた自分に気づくだけではなく、社会的な常識や規則などに照らし合わせて、自分のしたことが「良い・悪い」ということにとっても敏感になります。この時期に生じてくる感情は、自己評価的感情と言われ、恥、罪悪感・誇りの3つがあります。(佐久間, 2011)²⁾」

上村(1979)³⁾は同一の保育園児(1か月から2歳2か月)を対象に、自然場面や統制場面での観察から自己認識の広がりや明確化の様相を示している。たとえば、出席をとる際の自分の名前への反応の変化についてみると、1歳になって間もない頃は誰の名前でもハイと返事をしてしているが、1歳8か月以後になると自分の名前の時だけハイと返事をするようになっていく。さらに、名前を呼ばれて自分を指す、自分の名前を言う行動も見られる。1歳9か月以後になると、間違って返事をした子どもをたしなめるという様子が見られる。これらのことから「名前」というものが、「自己」の認知、自分と他者(友だち)との区別を明確にしてゆくうえで大きな役割を果たしていることがよくわかる。(柏木, 1983)⁴⁾

では実際に乳児グループに参加している子どもたちはどうだろうか。「自己」の発達について、「ほかほかひろば」の実践場面からまとめる。

表3にあるように、参加児の「お名前呼び」は「ひろば」に参加者がそろったところで最初に行う親子合同活動である。まず参加者全員の顔が見えるように輪になって座り、リーダーが動物のパペットを持って、名前を呼ぶ子どもの所に行く。パペットが「～ちゃん(くん)です。」と紹介し、その子の名前を入れてお名前呼びの歌を歌い、終わった後にみんなで「～ちゃん(くん)」と呼ぶ。そして返事などの反応に対して、拍手をして「お

はよう」と挨拶するという流れである。

この「お名前呼びの」場面での、名前を呼ばれた時の子どもたちの様子に着目し、4つの行動のタイプに分け、まとめたものが、図1である。図1から、個人差や発達年齢による違いはあるが、おおそⅠ～Ⅳの流れで自己の表出段階が発展していく様子がわかる。参加児のうち、「名前」という自己の認知の発達の初期段階をみるために、年齢の高い2歳以上の3名を除き、出席率が高く、変化がわかりやすいF児、P児と、比較対象として、F児、P児に比べて出席回数が少なく、年齢的にもこの両者の中間にあたるJ児の3名について、もう少し詳しくみていく。

て、もう少し詳しくみていく。

<「お名前呼び」場面の事例から>

事例1：F児（女）

7月まで（前期まで）は、F児は母の膝に座り参加はしているものの、自分の名前を呼ばれていることに気づかずに、母が代わりに返事をしていた。後期・10月になると自分の名前が呼ばれていることに気づき、恥ずかしそうに手を挙げる様子が見られるようになる。しだいに自分の順番ということがわかり、名前を呼ばれるのを心待ちにし返事をするようになった。

時期		5月20日	6月3日	6月17日	7月1日	7月22日	10月7日	11月18日	12月2日	12月16日	1月27日
乳 児 期	A 0歳4ヶ月(女)	後期から参加					I	I		I	I
	B 0歳7ヶ月(男)	I		I	I		IV		IV	I	
	C 0歳9ヶ月(女)	I			I	I	I	I			I
	D 0歳11ヶ月(男)	I	I		I				I		
	E 1歳1ヶ月(女)	IV	I			IV	III			III	IV
	F 1歳2ヶ月(女)	I	I		I		IV		IV	IV	IV
	G 1歳2ヶ月(女)	I	II	III	III		III	III	III		
幼 児 期 前 期	H 1歳5ヶ月(男)	IV	IV				IV			IV	IV
	I 1歳7ヶ月(女)	II	IV	IV		IV	III	IV	IV	IV	IV
	J 1歳7ヶ月(女)		I		I			IV		IV	IV
	K 1歳8ヶ月(男)		I	IV			III		IV		IV
	L 1歳8ヶ月(女)			I						IV	IV
	M 1歳9ヶ月(女)	III	III	IV	III		III	IV			III
	N 1歳9ヶ月(男)	後期から参加					III	III		IV	IV
	O 1歳9ヶ月(男)	I		II			前期のみ参加				
	P 1歳11ヶ月(男)	III	III	III	III	III	III	IV	IV	III	IV
	Q 1歳11ヶ月(女)	IV		IV	IV	IV	IV		IV	IV	IV
	R 2歳8ヶ月(男)	IV	IV			IV	IV			IV	IV
	S 2歳10ヶ月(男)	III	III	III	III		III	III	IV		
	T 2歳11ヶ月(男)	IV	IV	IV		IV		IV	IV	IV	IV
他児の返事の有無		有	有	無	無	有	無	無	無	無	無

* 図中、年齢(月齢)は活動開始初回時

I		自分が呼ばれていることに気づかない
II		とりあえず真似をして手だけ挙げる
III		恥ずかしがって抱きつく・逃げる・隠れる・母やリーダーが代理で返事
IV		自分で返事または手を挙げる/(+)返事と手を挙げる行為の両方

図1 「お名前呼び」場面にみる子どもたちの様子

事例2：J児（女）

11月までは名前を呼ばれても反応がなく、代わりに母が返事をすることが多かった。11月になって自分が呼ばれていることがわかるようになり、注目されると恥ずかしがる様子を見せ、手だけを挙げるようになった。F児に比べて全体的にお休みが多いこともあり、徐々に「お名前呼び」の場面に慣れてはいくが、F児ほどの変化は見られなかった。

事例3：P児（男）

5月からパペットが来ることによって自分が呼ばれていることがわかり、恥ずかしそうにする姿がみられた。7月になると自分が呼ばれるのがわかり、パペットが来ると少し離れた位置に逃げ、小さな声で返事をしている。その後、徐々に「お名前呼び」に慣れ、12月には自分で手を挙げて得意げに返事をしている。

この3人の事例から、「お名前呼び」場面で見られた「自己の発達」の特徴をまとめる。

①毎回の活動の積み重ねの中で、主体としての「自己」が明確になる

初期の段階では自分の名前でない時にも返事をしている子がいたが、後期にはほとんどみられなかった。これは自分の名前と友達の名前を区別できるようになった結果と考えられる。

②また、自分の名前を集団の中で繰り返し認識していく過程において、他児の名前にも興味・関心が育つ

名前を呼ばれている時は、周りの注目が集まるため、そのことを恥ずかしいと感じて母親の背後に隠れたり、逃げたりする子も見られる。しかし毎回の活動で繰り返し、場所や人に慣れることで、徐々に返事ができるようになってくる。

③集団に包まれ安定する中で、「人」とのかかわりを通し、自信へとつながり、外の世界に向け自発性が育まれていく

もっとも安心できる母の傍で、子どもは「お名前呼び」での返事のたびに周りから拍手され、母からもほめられ、一種の成功体験を積み重ねていく。「名前」という、「自己」が周囲に受容される体験の積み重ねの中で、子どもは自信をもち、自己肯定感が育まれ、外の世界へも自発的に働きかけていく意欲へとつながるのではないかと考えられる。

なお、この「お名前呼び」の場面で効果的な役割を果たしているのが、パペットであった。乳児は全体状況を把握する能力が未熟であるため、集団との関係で自己を捉えることが難しい。パペットがやってきて、子どもの名前を紹介することで、子ども自身にとって、今、自分が主役であるということが明確に意識しやすくなる。同時に、周りの子どもたちにとっても注目しやすく場面ははっきりとわかりやすくなる、といった効果がある。また、緊張しやすい子どもにとって、パペットの存在は緊張感を和らげてくれる。パペットが気になって近づいてきた他児との接点が生まれる子どもや、少し年齢の高い子どもの中には自らがパペットを操作し、リーダーの手伝いをする子どももいる。このように、パペットが「お名前呼び」場面で果たす役割は大きい。

（3）乳児期の子どもと集団活動

①乳児期の人間関係の発達と遊びの特徴

乳児期は人の一生で、とりわけ発達がめまぐるしい時期である。表5は、保育所保育指針の発達過程を元に、人間関係の発達と遊びに関する基本的な発達の特徴と流れをまとめたものである。

乳児期から幼児期にかけての子どもたちは、「大人との遊びを基盤として、それを仲間遊びへと拡大していく」（高橋，1984）⁵⁾と言われるように、子どもの遊びと人間関係の発展が密接に関わっている。本学の「ひろば」活動において、子どもは

親以外の大人（学生・教員・他児の親）や他児との多様な人々と接し、かかわる機会に出会う。

豊かな発達のためには、子どもは、「大人との関わりだけでなく、子ども同士の世界も必要であり、共に過ごす仲間は大切な意味を持っている。」（布施、2010）⁶⁾

表5 人間関係と遊びの発達

	人間関係に関する内容	遊び・ものに関する内容
おおむね6か月未満	・表情の変化や体の動き、喃語などで自分の欲求を表現 ・応答に関わる特定の大人との間に情緒的な絆を作成 ★他児と一緒に声を出す	★手足の動きが活発になり、ものを握る・つかむ
おおむね6か月から1歳3か月未満	・情緒的な絆の深まり ・あやしてもらうと喜ぶなどやりとりが増加 ・人見知り ・身近な大人との関係の中で、自分の意志や欲求を身振りなどで伝達 ・大人から向けられた簡単な言葉の理解	・周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発化
おおむね1歳3か月から2歳未満	・身近な人やものに自発的に働きかけ ・物をやり取りしたり、取り合い ★大人を遊びに誘い共同遊びを楽しむ。	・玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強化。
おおむね2歳	・自分の意志や欲求を言葉で表出 ・自我の育ちの表れとして、自己主張の高まり	・盛んに模倣し、物事の共通性への気づき ・大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむ

それでは、「ぼかぼかひろば」に参加している子どもたちは、大人と他児も含んだ集団の中でのどのような行動をとり、遊びに参加しているのだろうか。最後に、グループ活動を通して大きく変化がみられた3名の乳児について取り上げる。なお、表中の年齢は活動参加初回時の年齢である。

②乳児グループ「ぼかぼかひろば」の事例から

事例1：X児（1歳1か月：女）

X児の年間の活動を通しての様子をまとめたものが表6-1である。

活動開始当初のX児は人見知りが激しく、多人数がいる場に慣れるまで時間がかかっていた。また、母と二人で遊ぶことが多く見られたが、継続的に回を重ねていくことで、母とものを媒介にリーダーと関わる場面が増えていき、集団活動への参加や、母から離れて遊ぶ様子がみられるよう

になる。後期からは、他児の行動を模倣し、ものやリーダーを媒介に他児とのやりとりをする姿がみられるようになった。

表6-1 X児（1歳1か月：女）の様子

5月	人と目が合うと泣く。最初は隣の部屋で母に抱っこされ30分ほどすると落ち着く。隣の部屋とプレイルームの間に人形を置くと、じっと見ている。スヌーピーボール等ものを媒介にプレイルーム内へと移動。場に慣れ始めると母のすぐそばで一人で遊ぶ。何度も母を振り返り確認する。
6月	母以外の人が近付くと泣く。プレイルームに入る時には泣いている。隣の部屋で母と2人で安定する。場慣れると、母とリーダーの間で絵本を運ぶ。母と他児に人形を渡す等、母とのやりとりからものを媒介に、母以外の人との関わりへと広がる。帰りは周囲の人の顔を見ながらバイバイと手を振っていた。
7月	始めの集団活動に参加することができる。リーダーに何かを指さし「あ、あ」と求めるが、伝わらず泣いてしまう。終わりの集団活動では集団の輪に入ることを嫌がり泣く。母と一緒に遊びはじめ、その遊びを媒介にリーダーと関わるができる。M君（1歳1か月）に「あー、うー」と話しかけて抱きつく。
10月	目が合うと笑顔を見せてくれる。「ママー、ママー」とよく呼んでいた。S君（1歳7か月）とボールの貸し借りを楽しめたかったが、取られてしまい泣く。S君（1歳7か月）・U君（1歳2か月）・リーダーとボールを投げっこする。
11月	何度もおもちゃに惹かれて母から離れ、母を見失うが、泣かずに探して母の所へ行く。リーダーとトンネルの所まで一緒に行き、一人でトンネルをくぐったりと、母から離れて遊ぶことができる。Sちゃん（1歳1か月）が穴から「いいいいいいばあ」と顔を出すと、X児も模倣して同じように顔を出す。ままごとではつもりをもって遊ぶ。言葉が多く出てきている。
12月	母が見えなくてもしばらくは待っている。母から離れて遊ぶ時間がほとんどだが、時々存在を確認している。ままごとでは、SYちゃん（1歳10か月）の動きを見て、手伝おうとする。「おいしいね」「どうぞ」などやりとりも少し見られる。リーダーが他児と乾杯をしていると、X児もコップをもって参加する。
1月	自ら色々なコーナーに遊びに行く。SO君（1歳10か月）・SO君の母にペットボトルから注ぐ真似をして、みんなで乾杯をする。5か月になったI君に興味を持ち、しゃがみこんで見つめたり、頭をなでる。

事例2：Y児（0歳7か月：男）

Y児の年間の活動を通しての様子をまとめたものが表6-2である。

前期のY児は周囲への関心が強く、よく観察をしていた。他児が持っているおもちゃ等、興味があるものへは一直線にハイハイしていき、触ろうとし、その際、目的のものしか目に入っていないようで、持ち主である他児のことはあまり認識できていない様子であった。

後期になると、リーダーを模倣する場面が見ら

れるようになり、おもちゃを取り合う場面等でも、ものと人の両方がしっかり認識できている様子がうかがえるようになった。

表6-2 Y児（0歳7か月：男）

5月	泣いても指しゃぶりをすると落ち着く。音の鳴るボールやスヌーピーボール等興味あるものにはハイハイで追いかけてやろうとする。鈴やマラカスなど音に反応し、自分で鳴らす。なんでもすぐ口へ入れる。母が近くに居ると落ち着く。リーダーが笑いかけると笑う。他児が持っているものに興味があり、触ろうとする。
6月	周りで遊んでいるリーダーや他児の様子をしきりに目で追う。リーダーの目を見つめたり、話している口をじっと見る。
7月	ボールが上から下に転がるおもちゃをじっと見る。Hちゃん（1歳8か月）がトンネルの向こうから「おーい」と呼ぶのを見ている。
10月	SI君（1歳7か月）が遊んでいる車を取ろうとするが、SI君は取られないようにEちゃんを遠ざけようとする。次々と周囲のものに興味を示し、ハイハイで一直線に向かっていく。
11月	ペットボトルをジュースに見立て、リーダーが飲む真似をすると、Eちゃんも口をあけて飲む真似をする。その後リーダーにペットボトルを差し出し同じことを繰り返して欲しい様子。

事例3：Z児（1歳1か月：女）

Z児の年間の活動を通しての様子をまとめたものが表6-3である。

Z児（1歳1か月）は活動開始当初は母を拠点に、すぐそばで遊ぶ様子が見られたが、他児やリーダーへの興味・関心は強くみられた。その後、後期に入り、歩行がしっかりしてくると、自分が関心を持った月齢が少し上の特定の子の遊びの後を追って模倣する姿が多く見られるようになった。

3つの事例から

3名の乳児の事例から、母を心の拠りどころとし、時にものを媒介としながら、しだいに母以外の大人であるリーダーや他児との多様な人とのかわりを体験していく様子がわかった。

乳児期の発達において重要な「模倣」の相手もグループ活動では参加者の数だけ多様性に富んで

表6-3 Z児（1歳1か月：女）

5月	おもちゃに対して積極的に遊ぶ。母を中心に動き回るが、少し動いては母の元へ戻る。他児がピアノを弾くのを見て、反対側から弾く。
6月	Mちゃん（1歳3か月）と「どーぞ」とボールの貸し借りができる。椅子をブルドーザーのように押しながら歩く。
10月	SYちゃん（1歳10か月）とHちゃん（1歳8か月）がジャンプしたり覗いたりして遊んでいるのを見て、模倣し同じことをする。トンネルの中におもちゃが入っているのに惹かれて中に入る。途中で止まってしまってもリーダーが出口から声をかけると進んで通りきることができる。
11月	リーダーがネジを触って「冷たいーい」等と反応すると、何度もネジを指さして同じ反応を期待して待つ。パペットに興味を持ち、触ったり口に入れたりする。椅子を片付けたり、ビニールボールを運ぶ等、リーダーのお手伝いをする。

いる。

また、興味深いのは、X児の事例にみるように、敏感に相手の年齢が自分よりも上であるか下であるかを理解し、年齢が下である子どもに対して、かつて自分がしてもらったように、優しく気遣ったり、世話を焼くような場面である。これは「ひろば」での集団活動を通し、他児についての認識がしっかりと育ってきていることの表れといえる。

ここに取り上げた事例以外にも、こうした相手に合わせた行為は他の子どもたちにも見られた。たとえば近い年齢同士であればおもちゃを激しく取り合うような場面でも、相手が自分よりも小さい子であると、あらかじめトラブルを避けようと相手が近づいてくるとその場を離れたり、おもちゃを取られても強引な手段に訴えたりしない等の様子が、多くの子どもたちに同様に見られた。これは、個人差も発達差も幅広い中で、さまざまなかわりのモデルが周囲にあり、それらを成長とともに体験できるということや、集団に包まれて安定して過ごす経験を積み重ねる中で、精神的にゆとりをもって過ごすことができることに因るところが大きいのではないかと推察される。

このほか、きょうだい間でも、家庭では下のきよ

うだいに乱暴なふるまいをする子どもが、「ひろば」では、周囲にアピールするように兄や姉らしくふるまったり、弟妹を守ろうとする等の姿がみられる。

5. おわりに

ともすると、受け身の存在としてとらえられがちな乳児期の子どもたちであるが、こうして集団とのかかわりの中で改めて見てみると、実に主体的で能動的な存在であることがわかる。乳児期の子どもにとって、「ひろば」に成長のモデルとなる、幼児期前期の自分たちより少し年上の存在があることで、彼らの模倣をするなど、さまざまな関わりを体験することができる。

一方、年上の子どもたちにとって年下の乳児の存在があることで、同年齢の子どもたちとはまた異なるかかわりを体験する機会を得ることができる。これは「ひろば」が多彩な参加者で構成されていることによる。

確かに、乳児期において、基盤となるのは1対1の人間関係であるが、それは決して閉じた環境の中での1対1の関係ではない。

集団に包まれ安定した中で経験するかかわりは、「自己」「人」「もの」のすべてのかかわりを、より豊かで多様なものへと発展させようものと考ええる。

この乳児期の集団活動が子どもたち一人ひとりにとって、さらにはここに参加する大人たちにとっても、より豊かで主体的な「自己」が育まれるよう、「個」と「集団」が共に育ちあっていけるような活動をめざしていきたい。

そのためには、参加親子をサポートする存在であるリーダーのあり方についても考えていく必要がある。それはすなわち、次世代の担い手でもある学生の、保育者としての育ちとも深く結びつく。現在、この学生指導のあり方について研究を進めているところである。今後も研究課題として継続的に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、多くの方々にご協力いただきました。毎回の活動を楽しみにご参加

くださったお子様とご家族の皆様をはじめ、本グループ活動にかかわって下さったすべての方々にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 柳瀬洋美「大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅰ－親支援・家族支援の場としての「子育てひろば」－」東京家政学院大学紀要第50号 2010年 1-12頁
- 2) 佐久間路子「わたしはわたし－自己と感情－」遠藤利彦・佐久間路子・徳田治子・野田淳子『乳幼児のこころ－子育て・子育ての発達心理学』有斐閣 2011年 173-177頁
- 3) 植村美民「乳幼児期におけるエゴ（ego）の発達について」『心理学評論』22巻1号 京都大学文学部心理学教室内心理学評論刊行会1979年 28-44頁
- 4) 柏木恵子『子どもの「自己」の発達』東京大学出版会 1983年 35-39頁
- 5) 高橋たまき『乳幼児の遊び－その発達プロセス』新曜社 1984年 49-55頁
- 6) 布施佐代子「乳児の発達と保育」乳児保育研究会編『資料でわかる乳児の保育新時代』ひとなる書房 2010年 27-30頁

参考文献

- 1) 麻生武『乳幼児の心理－コミュニケーションと自我の発達』サイエンス社 2002年
- 2) 藤崎真知代・野田幸江・村田保太郎・中村美津子『保育のために発達心理学』新曜社 1998年
- 3) 神田英雄『0歳から3歳 保育・子育てと発達研究をむすぶ<乳児編>』全国保育団体連絡会 1997年
- 4) 厚生労働省『保育所保育指針』厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 2008年
- 5) 岡本夏木編『認識とことばの発達心理学』ミネルヴァ書房 1988年
- 6) 大場牧夫・大場幸夫・民秋言『＜新訂＞子どもと人間関係』萌文書林 2008年
- 7) P・ロシャ著 板倉昭二・開一夫監訳『乳児の世界』ミネルヴァ書房 2004年
- 8) 心理科学研究会編『育ちあう乳幼児心理学』有

斐閣 2001年

- 9) 白川蓉子・稲垣由子・北野幸子・奥山登美子『育ちあう乳幼児教育保育[第2版]』有斐閣2010年
- 10) 吉川晴美編『子育て発達支援－地域に開く大学として共に育つ保育活動から－』第Ⅰ巻 東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会 2001年
- 11) 吉川晴美編『子育て発達支援－地域に開く大学

として共に育つ保育活動から－』第Ⅱ巻 東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会 2002年

- 12) 吉川晴美編『子育て発達支援－地域に開く大学として共に育つ保育活動から－』第Ⅲ巻 東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会 2011年

(受付 2012.3.28 受理 2012.5.24)